

Title	インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について
Author(s)	長田, 俊樹
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1991, 23, p. 143-177
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/18446">https://hdl.handle.net/11094/18446</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# インド東部チャーターナグプル地方 における言語輻合について\*

長 田 俊 樹

## I. 序 論

インドのビハール州南部を中心として、マディヤ=プラデシュ州北東部、オリッサ州北部、そして西ベンガル州南西部にまたがって拡がるチャーターナグプル高原は、インド=アーリア語族とドラヴィダ語族、そしてムンダ語族に属する諸言語が共存する地域であり、これら南アジアの三語族が言語圏(linguistic area)を形成していることは、よく知られている。言語圏研究の父(Masica. 1976: xi) と呼ばれる Emeneau は、言語圏を次のように定義づけている。

'an area which includes languages belong to more than one family but showing traits in common which are found not to belong to the other members of (at least) one of the families'  
(Emeneau; 1956. 論文集 1980<sup>a</sup> の P. 124)

チャーターナグプル地方は典型的な言語圏であり、インド=アーリア語族に属する、ナグプリ語 (Nāgpurī 又は Nāgpurīyā), クルマリ語 (Kurmālī), ムルタ語 (Khorṭhā), パンチパルガニア語 (Panchparganiyā)<sup>(1)</sup>, ドラヴィダ

※ 小論は Uppal Publisher (インド・デリー) から出版された論文集「チャーターナグプル地方の文化：多様性と統一」('Cultural Chotanagpur: Unity and Diversity' 1991年1月刊行)に掲載された 'Notes on linguistic convergence in the Chotanagpur area' に基づいて筆者が日本語に書き改めたものである。日本語に書き改めるにあたっては、大幅に加筆修正が施された。なお英文原稿については、シカゴ大学のノーマン=ザイデ教授の御教示を仰いだ。言うまでもなく文責は全て筆者にある。ここでザイデ教授の適切で丁寧な御指導に対して、感謝の意を表わしたい。

(1) ここで挙げた四つのインド=アーリア諸語には、母音の長短の対立がない。ローマ字表記上、ā と a の区別を示したが、それぞれ /a/ と /ʌ/ 又は /ɔ/ を表わす。したがってカタカナ表記の際、ナグプリー等とはしなかった。

語族のクルク（オラオン）語（Kurux）とマルト語（Malto），そしてムンダ語族のサンタル語（Santali），ムンダ語（Muṅḍari），ホー語（Ho）<sup>(2)</sup>，カリア語（Kharīa）などが話されており，長い歴史的な接触の結果，これらの諸言語の間には語族を越えて類似点がみられるようになった。小論では，この共通の言語特徴のいくつかを Emeneau らの研究に照しながら，検証し，例示することを目的とする。

これまで，何人かの研究者が南アジアの地域特徴を提示してきた。（Masica, 1976: Appendix-A Inventory of Proposed Indian Areal Features を参照）そこで，まず最初に，これらの研究者がすでに論議してきた地域特徴——つまり (1) Echo-word Formation (2) Onomatopoeics (3) 類別詞 (4) 指示詞幹一について，チョターナーグプル地方の諸言語から例を挙げて論じる。次に，今回ここではじめて取り上げる特徴——(5)存在を表わす copula（「いる」，「ある」）と身分や属性を表わす copula（「です」）の区別一について詳しく例文をあげながら，検証する。ここで扱われるデータは，基本的に共時的な記述資料に基づくものであるが，すでに何人かの研究者が提示している史的解釈についても，必要に応じて示しておく。また，ここで問題とするのは，主に，チョターナーグプル地方の諸言語に限られる。我々のデータには限りがあるので，ナグプuri語以外のサダン諸語と(4)以外ではマルト語について考慮しない。

---

(2) ムンダ語族の Santali, Muṅḍari, Ho のカタカナ表記について，一言述べておく。Santali と Muṅḍari について，部族名としては，それぞれ Santal, Muṅḍa であるので，サンタル語，ムンダ語とした。語族としての Muṅḍa と一部族である Muṅḍa の人々が話す言語とを区別して，英語では，前者に Munda を，後者の個別言語に Mundari を当てている。インドの学者の中には，これを混同している人も多い。古くから，この混同を指摘する人がいて，日本語の翻訳がある。「言語学史」を書いたトムゼンもこの混同を取り上げ，言語グループとしては，Kherwarian を使用することを提案している。日本語表記では，個別言語名も言語グループ名もムンダとし，諸語やグループ等をつけ加えて個別言語名と区別する。

また，Grierson の Linguistic Survey of India にならって，Muṅḍa, Muṅḍari から，ムンダー，ムンダーリーと表記する人もいるが，ムンダ語で「村の長」を意味する muṅḍa は，決して a を伸ばして発音されることはない。

Ho については，単一開音節では，つねにニモーラで発音されるので「ホー」とした。なお，ho は「人」を意味し，ムンダ語の hoṛo「人」と対応し，ホー語では，歴史的にみて，母音間の r が全ておちている。

(3) Nagpuri の名称について，Sadani, Sadri も同じ個別言語名に使用されるが，B. P. Kesari 〃

## Ⅱ. チョターナーグプル地方の諸言語に共通する地域特徴

### (1) Echo-word Formation

Echo word が、言語学の術語として、どう定義づけられているのかについては、はっきり定まっているわけではない。例えば、Morin (1972) は、フランス語の echo-words についての論文の中で、echo words を単に 'reduplicated words or reduplicated roots' (P. 97) とだけ説明しているにすぎない。これに対し、reduplicated words と同義語としての Echo words という使われ方は、インドの諸言語を考える時にはあまりみられず、Chatterji (1926) は次のように定義づけている。

'A word is repeated partially (partially in the sense that a new syllable, the nature of which is generally fixed, is substituted for the initial one of the word in question, and the new word so formed, unmeaning by itself, echoes the sense and sound of the original word), and in this way the idea of *et cetera* and things similar to and *associated with that*, is expressed' (P. 176)

Chatterji の定義をもう少し具体的に、意味よりも構成に重点がおかれた、Emeneau (1956) の次のような定義をここでは採用する。

'basic word formulated as CVX is followed by an echo-word in which CV is replaced by a morpheme *gi-* or *u-* or the like (or C is replaced by *m-* or the like), and X echoes the X (or VX echoes the VX) of the basic word. The meaning of the echo word is "and the like";' (P. 114 Emeneau 1980 による)

これまで、チョターナーグプル地方で話される以外のインド=アリア諸語やドラヴィダ諸語及びムンダ諸語に関しては、この echo word の研究が発表

---

ア(1988, personal communication)によると、古くからチョターナーグプル地方に部族民と共存してきた人々を Sadan と呼ぶことから、Sadan たちの母語である Nagpuri, Kurmali, Khortha, Panchparganiya の4言語の総称を Sadani と定めるべきだと提案しており、筆者はそれを採用した。

されてきた。例えば、総論として、Bloch (1934), Emeneau (1980), ヒンディー (Hindi) 語については、Singh (1968), Abbi (1980), マラーティー語 (Marathi) については、Apte (1968), ベンガル語 (Bengali) については、Dimock (1957), デシア語 (Desia) (オリアー語の一方言) については、K. Mahapatra (1986: pp. 286-288)。ドラヴィダ諸語では、テルグ語 (Telugu) については、Bhaskarasao (1977), トダ語 (Toda) については、Emeneau (1938) 等がある。ムンダ諸語では、グタ語 (南ムンダ諸語) (Gta?) については K. Mahaparra (1976) と N. Zide (1976), ソーラー語 (So: ra:) については Ramamurti (1931, 1933, 1938) と Vitebsky (1978) 等がある。

そこで、チョターナーグプル地方の諸言語に共通する echo word を Monika Jordan=Horstmann (1974) の資料を使って、例示してみよう。それぞれ三つの語族に属する諸言語にみられる echo word の類似性を強調するために、この資料以外にも、別の資料や筆者自身のフィールドノートを使って、次のような表にまとめた。(表1) なお、Jordan=Horstmann の Sadani は、小論の Nagpuri と同じである。Nagpuri は Jordan=Horstmann (1974) から、それ以外については、すべて出典を示しておいた。

〔表1〕

- (a) Na. *jhaka-maka*- 'shine, shining' \**jhakk*- 'flash, shine' CDIAL 5071,  
*-maka*- :echo form  
 Mu. EM 2040 *jhaka-maka* 'shining with gold, silver or tinsel'  
 Sa. SD III-363 *jhak mak*, *jhak makao* 'polish, burnish, trim, clean'  
 SD III-362 *jhak jhak* 'shining, bright, glittering, glistening'  
 c. f. Kuiper (1965: A-59)  
 Kh. (FN) *jhaka maka* 'shining'  
 Kur. EUD *jhakmakrnā* 'shine' *jhakā makā* 'shining'
- (b) Na. *jhili-mili* 'glitter, shine' \**jhil*- 'flash' CDIAL 5391, *mili*:

echo form

Mu. EM 2063 *jili-mili* 'rippling and glittering water'

Sa. SD III-392 *jhil mil* 'glossy, showy, shining, resplendent, decked out'

Ho HED 165 *jili-mili, jil-mil* 'to sparkle'

Kh. (B) *j'lmile* 'glitter'

Kur. EUD *jhilmülrnā* 'glisten'

(c) Na. *ringi-cingi* 'colourful'

Mu. *ringi-chingi* 'colourful' (Bhaduri 1931)

EM 3589 *rigi migi* 'a cloth variegated with parallel lines or squashes of various colour'

Sa. SD V-91 *ringic' cingic'*, V-92 *ringi tingi* 'eager, fervant, delighted'

Kh. (FN) *ringi cingi* 'multi-colour'

Kur. *rīgī-cīgī* 'colourful' (Grignart)

(b) Na. *sigil-bigil* 'groaning, moaning'

Mu. EM 3955 *sigil-bigil, sigiḏ-bigiḏ* 'a number of men or animals (especially fish), moving about confusedly'

Sa. SD V-268 *sigic' bigic'*, V-269 *sigir bigir* 'in confusion, disordered'

Kh. (FN) *sugul bugul* 'confuse'

Kur. (J-H) *singilmingilrnā* 'to make about rapidly'

(e) Na. *kaba-kubu* 'bent, stooping' c. f. CDIAL 3301

Mu. EM 2159 *kaba-kobo, kaba-kubu, kabaḡ-kubuḡ, kabaṛ-kubuṛ, kabūr-a-kubūru, kiba-kabi* 'an accidental crookedness of the back, caused by pain owing to which one walks stooping but straightening oneself now and again'

Sa. SD III-410 *kabac' kubuc'* 'stooping, shufflingly (walk)' *kaba kobo*  
'bent, stooping'

Ho HED 175 *kaba-kubu* 'to be bent over because of some weakness  
or sickness in the waist etc.'

Kh. (FN) *kabar kubur, kapa kupu* 'bent, stooping'

Kur. EUD *kab'ākub'urnā, kabarkuburnā* 'stoop' c. f. DED 1131

(f) Na. *hilo-dolo* 'shaking' c. f. CDIAL 14120

Mu. EM 1702 *helo-delo, hila-dolo* 'jolting or shaking to and fro'

Sa. SD III-116 *hilo dolo, hilo dolo, hilo dholo* 'swayingly, waddling  
(walk, fat people)'

Kh. (FN) *hilo delo* 'shaking'

Kur. (J-H) *hilo dolo* 'shaking'

(g) Na. *chiri-piti* 'condition of being making a line (by children) for  
playing or doing something, of being scattering  
flowers' (FN)

Mu. EM 836 *chitir-bitir, citi-biti, chiti-biti, citir-bitir* 'dispersion, the  
condition being scattered about'

Sa. SD I-548 *ciri biri, ciri biti* 'into small pieces, thinly, sparsely,  
scattered'

Ho. HED 66 *chitir-bitir* 'to scatter'

Kh. (FN) *citi piti* 'scattered'

Kur. *chiri piti* 'dispersed' (Grirnard)

出典 [source] については表 2 に載せた。

## (2) Onomatopoeics

Echo words と Onomatopoeics は、混同されることがしばしばあり、最近インドで出版された辞典によると、Echo words は Onomatopoeic words

(4) に含まれると解釈されている。これは *echo words* の定義が定っていないことによる混同であり、Emeneau の定義に従うことで、こうした混同は避けられるように思われる。つまり、*Echo word* は、Emeneau (1956) の定義した語形をもち、擬態や擬声を表わすのではなく、「～と～に類するもの」を意味するのである。

一方、擬声語や擬態語について、*Onomatopoeitics* 以外にも、これまで種々の術語が使われてきた。例えば、*imitatives*, *onomatopes*, *chameleons*, *phonetic symbolism*, *phonaesthemes* or *phonaesthetic forms* (Emeneau 1980a P. 7) こうした術語に対して、Emeneau (1980<sup>a</sup>) は、Diffloth (1976: 263-264) に従って、もっとも抱括的な術語として '*expressive*' をこれから使用したい (P. 7) と述べている。そして、さらに、その下位範疇として、*symbolism* が音韻的である場合は、*ideophones* を用い、*onomatopoeitics* は、*symbolic* が音響的（つまり、音の模倣）である場合の *ideophones* に使うことを提案している (P. 7)。しかし、小論では、Emeneau の新提案は採用せず、*Onomatopoeitics* を音の模倣ばかりでなく、広く擬態語を含めた、Emeneau (1969) に沿った形で論を進めたい。

Emeneau (1969) は、インド=アーリア語族とドラヴィタ語族に共通にみられる *Onomatopoeitics* を研究し、'*Onomatopoeitic areal etymologies found in Dravidian and Indo-Aryan*' をまとめあげた。そこで筆者は、チョターナーグプル地方の諸言語に共通してみられる *Onomatopoeitics* を、この Emeneau の表から抜き出して、Emeneau が記述しなかったムンダ諸語や Nagpuri のデータを追加して、以下の表にまとめた。(表2)

---

(4) Harder Bahri '*Definitional Dictionary of Linguistic Terms*' (1985) によると、*echo words* は '*Onomatopoeic words formed by repetition or close imitation of a sound or sounds*' とある。インドでは、言語学の水準は決して高いと言えず、この辞典は、はからずも水準の低さを露呈するものとなった。

(5) 例えば、Bernard Comrie が中心となって作った *Lingua Descriptive Studies: Questionnaire* (*Lingua* 42, pp. 1-72, 1977) では *Onomatopes* 等の術語はなく、この *Ideophones* が使用されている。



[表 2]

- [1] DED 930a Kur. *kharar-kharar* 'sound of articles loosely packed and playing against one another (the creaking of a cart etc.) *kharar-kharararnā* 'to rattle loosely together'
- Na. ESD *gararāek* 'to gurgle' c. f. CDIAL 3972
- Mu. EM 1329 *gara-gara, gara-garal* 'the sound of gargling'
- Sa. SD II-391 *gar gar* 'gurgling, rumbling'
- Ho HED 108 *gara-guru* 'a rumbling sound of thunder'
- Kh. (B) *gararay* 'gargle'
- [2] Kur. EUD *kaṭar-kuṭurra'ā mōkhnā* 'crunch' c. f. DED 930b
- Na. ESD *khaṭ khuṭ* 'make noise while chewing' c. f. CDIAL 3771  
*kiṭ kiṭ* 'gnash the teeth' c. f. CDIAL 3154
- Mu. EM 2256 *kaṭa-kuṭu* 'the moderate sound of persistent crunching of small brass'
- EM 2258 *kaṭar kaṭar* 'crunching, gnawing'
- kaṭar kuṭur* 'the moderate sound of crunching small brass, other small hard things'
- Sa. SD III-474 *kaṭar kuṭur* 'crunching'
- SD III-678 *khaṭar khaṭar, khaṭar khuṭur* 'nibbling, gnawing, crunching, cracking'
- [9] DED 1382 Kur. *guṭgururnā, guṭguṭamba'anā* 'to make a succession of abrupt noises rapidly repeated (e. g. thunder, handmill, hookah, a short re-echoing among hills)
- Na. (FN) *guṭgurāek* 'to rumble a thunder, to growl a stomach' c. f. CDIAL 4180
- Mu. EM 1540 *guru-guru* 'it refers to not very near thunder'
- EM 1393 *gara-guru, gara-giri, gar-gir, gar-gur* 'the rolling

of pretty near thunder'

- Sa. SD II-504 *gur gur* 'rolling, rumbling' *gurgurəu* 'roll, rumble'  
Ho HED 123 *guru-gura* 'making a loud rumbling noise'
- [12] Kur. EUD *gurgurnā* 'growl' c. f. DED 1538  
Na. ESD *gurgurāek* 'to purr (of cat)' c. f. CDIAL 4207  
Mu. EM 1388 *gargor* 'the purring of cats'  
Kh. (FN) *gur-gur* 'purring of cat'
- [16] Na. (FN) *sarsar* 'noise of a snake crawling, rustling sound made  
by a wind'  
Mu. EM 3857 *sar-sar* '(1) of grains, of sand, or of slanting rain,  
hitting leaves, especially dry leaves. (2) of a top, or  
potter's wheel touching dry leaves whilst spinning'  
Sa. SD V-203 *sar sar* 'to make a bubbling, lapping, splashing sound'  
*sarsarao* 'to make a rustling sound'  
c. f. Kur. EUD *sarsarrnā* 'rustle' *sarsarrnā* (FN) 'fell out of sorts'
- [32] Kur. EUD *burburī*, *burburrnā* 'to bubble, bubbling' c. f. DED 3490  
Na. (FN) *burburāek* 'to bubble (water)' c. f. CDIAL 9278  
Mu. EM 671 *buruŭ-buruŭ*, *buduŭ-buduŭ* 'the bubbling of water  
especially previous to  
boiling point'  
Sa. SD I-350 *buduc' buduc'* 'equal to *bidic' bidic'*  
SD I-283 *bidic' bidic'* 'bubbling' c. f. Kuiper (1965: A-1)  
Ho HED 49 *bur burī*: 'bubbles'  
Kh. (FN) *bur bur* 'bubbling'
- [39] DED 4276 Kur. *barbarrnā* 'to talk loudly, chatter noisily'  
Na. ESD *barbarāek* 'chatter' *bharbharāek* 'chatter loudly'  
c. f. CDIAL 9122

Mu. EM 408 *bara-bara* 'very fast speaking'

Sa. SD I-389 *bhar bhar* 'incessantly, continually, freely, openly,  
fluently, flowingly'

*bhar bharao* 'speak, fall down (rain) incessantly,  
continually'

[40] Kur. EUD *garbar* 'disorderly' c. f. DED 939

Na. ESD *garbaræk* 'be confused' c. f. CDIAL 3974

Mu. EM 1396 *garbar, garabara, garbarao* 'departure or disturbance  
from the rigiht, regular or customary order'

Sa. SD II-360 *gad bad* 'confusion, disorder'

*gadbadao* 'put into disorder or confusion'

c. f. Kuiper (1965: C-39)

[46] DEN S<sup>2</sup>70 Kur. *musmusurnā* 'to smile', *muskārnā* 'to smile'

Na. ESD *muskuræk, musmusæk* 'to smile' c. f. CDIAL 10227

Mu. EM 2850 *musuḡ-musuḡ, mogoḡ-mogoḡ, mergoḡ-mergoḡ, merlon-*  
*merlon, mirun-mirlun, moḡ-moḡ, muguḡ-muguḡ*

'a smile, the act of smiling'

[Sources]

Kurux DED=A Dravidian Etymological Dictionary.  
(Kur.)

DEN=Dravidian Etymological Notes.

EUD=An English-Uraon Dictionary.

Nagpuri ESD=English-Sadri Dictionary.  
(Na.)

Mundari EM=Encyclopaedia Mundarica. Vols. I-XIII.  
(Mu.)

Santali SD=A Santali Dictionary. Vols. I-V.  
(Sa.)

Ho HED=Ho-English Dictionary.

Kharia (B)=H. S. Biligiri (1965)  
(Kh.)

[Abbreviation]

CDIAL=A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages.

FN=My own Field Notes.

[Orthography]

Kur. '=[?], Mu. Vowel+<sub>^</sub>=[?], Ho:=[?]

Mu. b, d+<sub>^</sub> and Sa. p', t', c', k' denote so-called 'checked consonants': phonetically devoicing pre-glottalization [ʔb], [ʔd] and [ʔp], [ʔt], [ʔc], [ʔk] respectively.

Mu. Vowel+<sup>v</sup>=the short vowel which can be omitted in a quick speech.

(3) 類別詞

我々、日本語を母語とする者にとっては、類別詞は特別珍しいものではない。我々はものを数える際には、数えるものの種類によって、類別詞を使いわけている。例えば、本は1冊、鉛筆は1本、紙は1枚といった具合で、これら冊、本、枚を、類別詞と呼ぶのである。

この類別詞は、日本語のように豊富ではないが、チョターナーグプル地方の全ての言語にみられる。そこで、各々の言語の類別詞をこれまでの研究者の記述にしたがって提示し、最後に、この地域の類別詞の起源について Emeneau の説を紹介する。

Nowrangi (1956) は、Nagpuri の類別詞を次のように記述している。類別詞として *go, got, gor, tho* 等があり、これら類別詞を含んだ例文をあげると、*mor ekego ghora rahe* (*mor* 「私の」 *ek* 又は *eke* 「①」, *go* 「類別詞」, *ghora* 「馬」, *rahe* 「居る」) 「私のところには、一頭の馬がいる。」, *mor gotek ghora*

*rahe*「私のところには、一頭の馬がいる」。また、*mūr*「頭」は家畜を数える時に、*khāra*「枚、個」は布等を数える時にそれぞれ用いられる。例えば、*pāc mūrgaru* (*pāc*「5」*garu*「家畜」)「5頭の家畜」、*pāc khāra luga* (*luga*「布」)「5枚の布」。形態素の順序は、主に、数詞+類別詞+名詞であるが、*got-ek* の場合には類別詞が数詞の前にあらわれている。

Emeneau (1956) は Kuṛux の類別詞について次のように述べている。(Emeneau 1980<sup>a</sup> の P. 116) Kuṛux の体系は、Magadhan 諸語の体系とよく似ており、類別詞の多くは、隣接する Magadhan 諸語、つまり Bihari や Oriya からの借用語である。例えば *jhan*, *gotangi*, *thur* [c. f. Bengali-*tu*], これら類別詞は、インドはアーリア諸語から借用した数詞とともに用いられるばかりでなく、個有の数詞(2から4)とともに、使用される。

次にムンダ諸語についてみてみよう。まず、Santali では *hor*「人」、*oraḳ'* (元の意味は「家」又は *gharōñj*「家族」、*sərim* (元の意味は「屋根」)「軒」*boḥk'*「頭」が類別詞として使われるが、これらは、いずれも個有語である。(Bodding 1929: 60)

Muṇḍari と Ho も Santali と同様の類別詞がみられる。*horo*「人」、*oraḳ'*「軒」、*booḳ'*「頭」が Muṇḍari では類別詞として用いられる。例えば、*api horo hon-ko* (*api*「3」、*horo*「人：類別詞」、*hon*「子」、*-ko*: 複数接辞)「3人の子供たち」(Hoffmann 1903: 65) Ho では、*oaḳ'*, *ho*, *booḳ'* がそれぞれ家、人、家畜を数える時に用いられる。(Deeney 1975: 101) また、筆者自身の観察によると、インド=アーリア諸語からの借用語である *jon/jan* が Muṇḍari, Ho で人を数える際にしばしば使用されるが、この *jon/jan* はいつもインド=アーリア語の数詞(個有の数詞と並行してインド=アーリア諸語の数詞がひんばんに使われている)と共にのみみられる。例えば、*tin jon/jan, hon-ko* (*tin*「3」)「3人の子供たち」。しかし、*\*tin horo hon-ko* や *\*api jon/jan hon-ko* はふつうみられない。

Malhotra (1982) は、Kharīa の類別詞について、次のように記述してい

る。 *jhan* (IA [インド=アーリアン] *jan, jən*) は人間を表わす名詞と共に使われる類別詞である。 また *ge* はインド=アーリア諸語の数詞とともに用いられるが、 *thon* は、 *Kharia* 個有の数詞 *ubar* 「2」とともに用いられる。 *tin jhan lebu-ki* (*lebu* 「人間」 -*ki* : 複数接辞) 「3人の人間」 *tin-go kunru* (*go* : 類別詞, *kunru* 「子」) 「3人の子供たち」, *hokra<sup>?</sup> ubar-thon kunru ai-j-kiyar* (*hokra<sup>?</sup>* 「彼の」, *ubar* 「2」, *thon* : 類別詞, *aij* 「いる」, *kiyar* : 双数接辞) 「彼には二人の子供がいる」

以上みてきたように、ムンダ諸語の形態素の語順は数詞+類別詞+名詞である。

史的解釈については、Emeneau (1956) の次のような指摘を引用するにとどめておく。

'My reconstruction, relying on the fact that some, if not only, Indo-Aryan classifier morphemes are used in all the languages involved and on the further fact that these morphemes are used only with Indo-Aryan numerals in some of the non Indo-Aryan languages, is that the construction (so far as India is concerned) is originally Indo-Aryan' (Emeneau 1980<sup>a</sup> の P. 118)

なお、類別詞の使用は、日本語や中国語をはじめ、南アジアを越えて、東南アジアから東アジアにかけて、かなり広範囲にみられ、Masica (1976) は、インドの地域特徴とは認めていない。(Masica: 1976 Appendix A 参照)

#### (4) 指示詞幹 (Demonstrative Base)

ここまでみてきた地域特徴は、すでに Bloch (1934) や Emeneau (1956) が指摘した、言わば「古典的」な特徴に類するが、最近、問題となっている指示詞幹について、ここでは取り上げてみたい。

まず最初に、通時的考察に入る前に、それぞれ個別言語の指示詞を少し詳しく述べ、借用関係等、史的問題については、今までの研究者の説を紹介しながらみていくことにする。

Nagpuri の指示体系は、近称 *i*、遠称 *u* の二体系である。(Monika Jordan=Horstmann 1968: 66-7 Nawrangī 1956: 37) これらは、指示代名詞として「これ」「それ」を表わすほかに人称代名詞として、「彼、彼女、それ」をも表わす。また、指示形容詞として(「この」、「その」)そのまま名詞を修飾する。ここで注目すべき点は、指示詞幹 *i*、*u* から派生される *ihā* 「ここ」、*uhā* 「そこ」の交替形として、*hiyā* 「ここ」、*huā* 「そこ」という *h-* を含む語形がみられることである。*h-* を含んだ語形としては、*hine*、*hinde* 「こちらへ」、*hune*、*hunde* 「そちらへ」がある。

Kurux の指示体系は、近称 *i*、中称 *hu*、遠称 *a* の三体系で、これらは指示形容詞「これ」「それ」「あれ」を意味する。指示代名詞は男性名詞では *is*、*hus*、*as*、女性及び中性名詞では、*id*、*hud*、*ad* である。(Hahn: 1911, 23) ここでも注目すべき点は、語頭 *h-* を含む交替形が指示詞幹から派生される、場所を表わす副詞にみられることである。つまり、*isan/hisan* 「ここ」、*asan/hasan* 「あそこ」、*husan* 「そこ」(これに対応する \**usan* はない); *iyā/hiyā* 「ここに」、*ayyā/hayyā* 「あそこに」、*huiyā* 「そこに」; *ittrā/hittrā* 「こちら側に」、*attra/hattra* 「あちら側」、*huttrā* 「そちら側に」(Bleses 1956)

Kurux と同じドラヴィダ語族に属する Malto は近称 *i*、中称 *u*、遠称 *a* の三体系である。これに加えて、派生語として *na* 「あそこにいる人」がある。

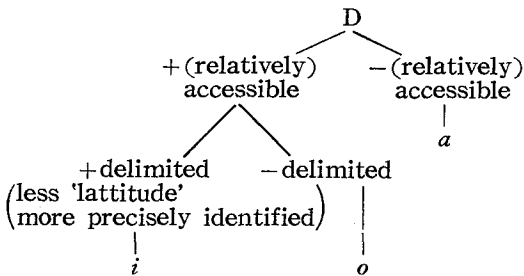
Zide (1972) は、Bodding (1929) のデータを使って、Santali の指示体系を分析し、次のように述べている。

'Santali has three demonstrative stems — O <<this>>, i <<that>>, and a <<yonder>> — indicating locations relative to the speaker's position. These three regions can be further divided into three on the same basis — by the use of the pre-demonstrative qualifiers n <<near>>: <<zero>> <<unmarked>>: and h <<far>>, which provide specification of nine degrees of relative distance (P. 267)

つまり、近い方から遠い方へ、*no-* (又は *nu-*)、*on-* (又は *un-*)、*hon-* (又は

*hun-*, *ni-* (*ne-*), *in-* (*en-*), *hin* (*hen*), *na-*, *an-* (*ən-*), *han-* (*hən-*)<sup>(6)</sup> の 9 体系をもつと解釈した。

しかし、後に、Zide (1985) は、この形態音素分析は正しいとしながらも、意味分析のまちがいを認め、以下のように再解釈している。接頭辞 (P) *n-*, *h-* が基本的な近称、中称、遠称を決定すること、そして、指示詞幹 (D) である *o-*, *i-*, *a-* を次のように分析している。(P. 7)



Muṅdari の指示体系は、Hoffmann (1903, P. 9) をはじめ、Cook (1966, P. 179), N. K. Sinha (1975, P. 65) とも、近称 *ne*, 中称 *en*, 遠称 *han* の三体系をあげているが、上記の Santali の分析をふまえた上で、Munda (1979) は、Muṅdari の指示体系も、Santali と同様 9 体系であることを指摘した。(P. 16-17) すなわち、*i*, *e*, *a* が指示詞幹であり、それに接頭辞 *n-* ≪近≫, *o* ≪中≫, *h-* ≪遠≫ がそれぞれついた形で  $3 \times 3 = 9$  体系となる。

Deeney (1978) によると、Ho の体系は、近称 *ne*, 中称 *en*, 遠称 *han* の三体系であるが、Santali や Muṅdari と同様  $3 \times 3 = 9$  体系である可能性が強い。詳しい調査をまたなくてはならないが、Deeney (1978) には、*nai* 'this one (same as ni)' *ne* 'this' *ni-* 'this one' がみられることから、9 体系と言ってよかろうと思われる。

(6) カッコの中の交替形は、母音調和による。後につづく母音が高母音の場合には、*i*, *u*, *ə* が、その他の母音の場合には *e*, *o*, *a* が交替してあらわれる。また、指示詞幹 (*o*, *i*, *a*) とその接頭辞 (*n-*, *o-*, *h-*) に、Zide (1972) は分析しているが、接頭辞が *o-*, *h-* の時には、指示詞幹の後に *-n* がくる。



Kharīa の指示体系は、近い方から遠い方へ *u*, *ho*, *han*, *hin* の四体系を示す。(Biligiri: 1965, P. 65, Malhotra: 1982, P. 52), ただし、この四体系は指示代名詞としてのみあらわれ、指示形容詞の場合、*han* は場所を示す名詞と共に、*hin* は時間を表わす名詞とともにもちいられ、*han* と *hin* は相補分布をなす。例えば、*han paro-te* (*han*: 指示形容詞, *paro* 「側」, *te* 「に」) 「そちら側に」、*hin bhēre* (*hin*: 指示形容詞, *bhēre* 「時」) 「その時」、時間や場所を表わす名詞以外では、近称 *u*, 遠称 *ho* の二体系である。*u solo?* (*u*: 指示形容詞, *solo?* 「犬」) 「その犬」、*ho konseldu* (*ho*: 指示形容詞, *konseldu* 「女」) 「その女」。(Malhotra: 1982, P. 52-3) Biligiri (1965) によると *hin* は 'invisible' を指す (P. 65) とあるが、Malhotra (1982) はこれを否定し、*ho* や *han* も見えない対象物を指しうることを指摘している。(P. 53)

ここで、これまでみてきた指示詞幹を表にまとめてみよう。(次頁〔表3〕)

〔表3〕

INDO-ARYAN	近称	中称	遠称
Nagpuri (Nowrangi)	i		u
DRAVIDIAN			
Kuṛux (Emeneau)	i	hu	a
Malto (Emeneau)	i	u	a
MVNDA			
Santali (Bodding & Zide)	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ o-	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ i-	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ a-
Muṇḍari (Munda)	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ i-	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ e-	$\begin{Bmatrix} n \\ \phi \\ h \end{Bmatrix}$ a-
(Hoffmann, Cook, ne N. K. Sinha)		en	han
Ho (Deeney)	ne	en	han

Khaṛia (Malhotra)

u

ho {han}  
hin }

なお, Santali, Muṇdari, Ho は Zide (1985) の表による. Zide も指摘しているように, これは形態音素分析にもとづく解釈であり, 実際意味論の立場から言えば,  $n+D$  (指示詞幹, つまり, Santali の  $o-$ ,  $i-$ ,  $a-$ , Muṇdari の  $i-$ ,  $e-$   $a-$ ) が近称を,  $\phi+D$  が中称を,  $h+D$  が遠称を指す.

歴史的解釈に入る前に, Zide が触れている sound symbolism について, 少しだけ述べておく. すなわち, 前舌高母音または前舌中母音が近称を, grave 母音が遠称をそれぞれ示すという普遍性が, Khaṛia の近称  $u-$ , Santali の近称  $o-$  <sup>(7)</sup> をのぞけば, 適応されるように見える. しかし, これ以上詳しいことは, ここでは述べない.

筆者の知る限り, 指示詞についての借用関係をはじめて取り上げたのは, de Vreese (1968) である.

すでに注目すべき点としてあげた,  $h-$  を含んだ語形は, Nagpuri に隣接する Maithili (マイティリー) や Bhojpuri (ボジュプリ), そして Bengali や Oriya の方言等, Magadhan <sup>(8)</sup> 諸語には広くみられる. 例えば, Maithili 南部方言, *hini, hinhi, inhe inh<sup>a</sup>, in<sup>a</sup>* 'this, he, she' *huni, hunhi* 'that, he, she', Bhojpuri, *hinhi, inhi* 'this, he, she' *hunhi, unhi* 'that, he, she' Bengali Backergunge 方言 *hini* 'he, she' Oriya Bhatṛi 方言 (マディヤ=プラデシュ州バスタール県の北東部) *hun, hāy* 'he, she' (de Vreese 1968, pp. 359-60)

これら  $h-$  を含む語形については, de Vreese (1968) は, Jha (1958), Tiwari

(7) Zide (1985) は, Zide (1972) の意味解釈のまちがいを認め  $o$  を [+relatively accessible] [-delimited] と再解釈したので, 近称  $o-$  が決してこの普遍性に反する例とは言えないと述べている (P. 3).

(8) Chatterji (1926) の分類・名称によった. Encyclopaedia Britannica で Cardona が試みた分類では, Assamese, Bengali, Oriya を Eastern Group また, Maithili, Bhojpuri 等の Bihari は, Midland Group と Chatterji とは異なる.

(1960), Chatterji (1926) のインド=アーリア諸語自体の史的音韻変化による説明を簡単に紹介した後、詳細な検証によって、これらが ‘un-Aryan’ の語形から派生されたもので、インド=アーリア諸語に起源を求める必要はないように思われると述べて、次のように結論づけている。

‘A comparison of the Mai(thili) pronouns of the type hini, ini/huni, uni with the above demonstratives (=ムンダ諸語の指示詞), the Munda origin of which is well established, sufficiently shows that we are concerned here with borrowings from Mundas’ (P. 360)

このいくぶん性急すぎるように思われる結論は、Emeneau (1980b)による、次のような反論をまねくことになる。すなわち、この語頭の *h-* がまったくインド=アーリア諸語になじみのないものではなく、現代インド=アーリア諸語の Sindhi や Marathi にみられる他、Bloch (1934) の研究にしたがって、すでに Asoka 碑文にも次のような形がみられることを、Emeneau (1980b) は指摘している。(P. 22) *hevam* ‘thus’ (=evam) *hemeva* ‘just thus’ (< Skt. *evam eva*), *hida* ‘here’ (=Skt. *iha*, Pali and Aśoka *idha*), *hedisa-* ‘like this’ (=edisa-, Pali *edisa-*), *hesā* ‘this (fem)’ (=esā, skt. *eṣā*). Bloch はこの *h-* について、‘expressiveness’ を強調するためとの説明を与えているが、Emeneau (1980b) は、‘Presumably this is where the Magadhan forms collected by De Vreese should be classed’ (P. 22) と、de Vreese のムンダ諸語からの借用説に疑問を投げかけている。

Emeneau (1980b) は、Magadhan 諸語の指示詞が、Muṇḍa 諸語からの借用語であることに、かなりの留保を示しているのに対して、Dravida 諸語の Kuṛux の語頭の *h-*、そして、Malto の *na* については、Muṇḍa 諸語からの借用であろうと推測している。

まず、Kuṛux について、Emeneau (1980b) は、Kuṛux と Muṇḍari は接触しており、Kuṛux の中称 *hu-* は他のドラヴィダ諸語と比べて特異なものであり、Santali-Muṇḍari の *hu-/ho-* からの借用であるかもしれないと述べて

いる (P. 23). しかし, Kuwi (小論では問題としない) の *he-*, *hu-* を考察した結果, これらについて, *hu/ho* からの借用ではなく, 'We might think of borrowing of merely initial *h-* as a marker of the more remote' (P. 24) と結論づけている.

一方, Malto の指示詞は, 近称 *i*, 中称 *u*, 遠称 *a* で, Old Tamil や Kannada と同一の語形と体系をもち, Dravidian 個有のものと思われる. それに加えて, *na* 'that one [remote] who is present' がみられるが (Emeneau 1980b, P. 26), これは Santali の *na-* 'near within the remote zone' と関連があり, 'The whole morph is undoubtedly a borrowing from Santali into Malto (the languages are contiguous)' (P. 26) と Emeneau (1980b) は断定している.

さて, Indo-Aryan の *h-* や Kuṛux の *h-* の起源とされたムンダ諸語について, ムンダ研究者はどうみているのだろうか.

Pinnow (1965) は, de Vreese や Emeneau の指摘以前に, オーストロ=アジア諸語の比較から, Proto-Austro-asiatic demonstrative として, 14 \**ha*-\**hi*/*he*-\**hu*/*ho* をあげている (P. 33). 後に述べるように, Zide (1985) は, 語頭の *h-* が Proto-Munda にはみられないことを指摘しているし, 地域特徴をあまり考慮に入れない Pinnow の研究は, 吟味する必要がある.

では, Pinnow の後, 南ムンダ諸語の研究成果を取り入れ, 地域特徴についても配慮されている Zide (1985) は, de Vreese や Emeneau の説をどうみているのだろうか.

Zide (1985) は, まず de Vreese の説については, 'There may be borrowings from IA into Munda, but I don't know of any' (P. 10) と, 否定的ながらも, 結論を出すのを避けている.

そして, 問題の *h-* については, Proto-Muṇḍa には \**h* は再構されないし, Santali や Muṇḍari の *h-* は Proto North Muṇḍa の \**k* にさかのぼること, *h-* の内的起源 (internal sources) として Korcu や Kharīa にみられ

るように, 'laryngeal vowels' から変化したものがあるが, Santali や Muṇḍari の *h-* はこの例にはあてはまらないこと, の2点をあげて, 次のように結論づけている。

'I suggest that 'expressive *h*' was borrowed (perhaps independently in several of the NM (=North Munda) languages), and then phonologized and morphologized. —中略— I do not see 'expressive *h*' — restricted, as in Gutob, or generalised as in Kherwarian — as an old Munda feature. Certainly it was a widespread areal feature, and available for the borrowing by various Munda languages.' (P. 10)

以上, 安易な借用関係を想定することは可能であるが, ここでは, それぞれの専門家の説を紹介するにとどめておく。ここで言えることは, その起源についてはいろんな説があるまでも, チョターナーグブル地方の諸言語には, 指示詞幹の中に, 語頭の *h-* を含む語形が共通にみられる, ということである。上述の Zide の指摘からもわかるように, これは明らかに, かなり広範囲にみられる地域特徴である。

#### (5) 存在を表わす copula と身分・属性を表わす copula の区別

さて, 最後にあげた地域特徴は, これまであまり詳しく論議されてこなかった, 存在を表わす copula (existential copula) と身分・属性を表わす copula (identity copula) の区別である。すでに, Munda (1983) が, 'concepts to be someone and to be somewhere are differently expressed in all the Jharkhand languages' (EPW. P. 1092) と指摘しているが, 詳細については述べてはいない。

また, Lakshmi Bai (1986) が, インドの地域特徴として, The verb "to be" が existential verb と equational verb の二つに形式的に区別されること, を指摘している。しかし, 彼女のデータ処理がきわめてずさんであるこ

(9) と、現在形の肯定、否定だけを問題とし、未来形や過去形については論議されていないこと、ムンダ諸語がどの現代インド=アーリア諸語と隣接しているのか把握されていないし、その誤った地理感覚で、安易に借用関係を断定していること等、あまりにも多くの誤りを含んでいるため、はっきり言って使いものにはならず、筆者の検証が初めてのものと言ってよからう。

まず最初に、Muṇḍari からみていこう。

Muṇḍari には、存在を表わす copula *mena*<sup>?</sup> 一つまり、主語の空間における位置や場所を示す一と、身分や属性を示す copula *tan* —主語のアイデンティティを指す—の二つの copula がある。

(1) Soma oṛa<sup>?</sup>-re *mena*<sup>?</sup>-i-a

「人名」 「家」「に」 3人称 Predicator  
単数 (=Prd)

「ソマは家にいる」

(2) Soma *tan*-i<sup>?</sup>

3人称  
単数

「(彼は)ソマです」

*tan* は、さらに進行相を示す *ta* と主語フォーカス=マーカー *n* に分析できるように思われる。次の文と(2)をくらべよ。

(9) 例えば、Muṇḍari のデータを Langendoen (1967) から引用しているのだが、読み込みが足りないために、(25) *ne ba salukid ta-n-a-q* 'This flower is a lotus' (P. 84) にみられる、identity copula *ta-n*、そしてその否定、(47) *ne ba salukid ka ta-n-a-q* 'This flower is not a lotus' (P. 88) にみられる *ka tan* については全く触れておらず、Muṇḍari には *mena*<sup>?</sup> という copula だけがあり、否定形も *ban* だけであると解釈している (Lakshmi Bai P. 204)。また、このムンダ諸語のデータには、ミスプリントか、引用まちがいか、わからないが、誤りが多すぎる。P. 204 l. 12 誤 *nalege* → 正 *na lage*, l. 18 *aṇun* → *aṇum*, l. 23 *menak*<sup>?</sup> → *menak*<sup>?</sup> 又は *mena*<sup>?</sup> l. 27. *banuk* → *bānuk*<sup>?</sup>, l. 36 *hodo* → *hoḍo* l. 36 *maran* → *maran*, たった1頁に少なくとも六つの引用文のまちがいがあることや、ERRATA には訂正されていないことから、ミスプリントではなく、Lakshmi Bai のまちがいであろう。

(10) (9)でみた解釈ミスに基づいて、Muṇḍari に *ban* と *ka* の区別 (実際にはもちろんある) がなくなっただけは、多分 Hindi の影響によるものであろう (P. 205) と述べているが、Muṇḍari と Hindi は教育現場以外では接触はあまりなく、Muṇḍari と混在する I A (Nagpuri) には、小論でみるように、この区別 (すなわち identity copula の否定形と existential copula の否定形の区別) がみられる。

また、Kuṛux についても、我々がみるように existential copula と identity copula の区別があるにもかかわらず、ないと断定した上で Hindi の影響によって失なわれたものだ (P. 206) ともっともらしく結論づけている。このように、まちがいが議論のおかしい点を指摘すると、攻撃にいとまがない。

(3) Soma oṛaʔ-re-eʔ jom-ta-n-a

3人称「食べる」 Prd  
単数

「ソマは家で食べている」

二つの copula (*menaʔ*, *tan*) とも欠如動詞 (defective verb) で、現在時制にのみあらわれ、過去時制、未来時制では *tai* という形であらわれ、存在を表わす copula と身分・属性をあらわす copula の区別はなくなる。

(4) Soma oṛaʔ-re tai-ke -n-a 「ソマは家に居た」

過去 主語 Prd  
フォーカス

(5) Soma tai-ke -n-a

過去 主語 Prd  
フォーカス

「(彼は)ソマでした」もしくは「ソマは居た」

(6) Soma tai-n-a-eʔ

主語 Prd 3人称単数  
フォーカス

「ソマでしょう」もしくは「ソマは居るでしょう」

(7) Soma oṛaʔ-re tai-n-a-eʔ

主語 Prd 3人称単  
フォーカス

「ソマは家に居るでしょう」

ところで、未来時制の次のような文章では *tai* の変りに *bai-oʔ* 「～なる」(*bai* 「作る」, *oʔ*: Potential passive marker) が用いられる。つまり、(9)の方が(9)よりもずっと自然な文章である。なお、*bai* は、削除されることもある。

(8) Soma najom tan-iʔ

「妖術師」

「ソマは妖術師です」

(9) Soma najom tai-n-a-eʔ

「ソマは妖術師(になる)でしょう」

(9') Soma najom bai-oʔ-a-eʔ

「ソマは妖術師になるでしょう」

(9'') Soma najom  $\phi$ -oʔ-a-eʔ

「ソマは妖術師になるでしょう」

次に、否定文についてみてみよう。*menaʔ* の否定形には、三つの交替形がある。





わす copula の区別はみられるものの Kherwarian との対応語形はなく、隣接するインド=アーリア諸語の Nagpuri からの借用語形がみられる。

Kharia の存在を表わす copula は、*aij* (Indo-Aryan [=IA] からの借用語) で、*aij* は助動詞としても用いられる。一方、身分・属性を表わす copula は *heke* (IA からの借用語) である。どちらの copula も Munđari と同様、現在形だけがみられる欠如動詞で、過去形、未来形は、どちらの copula も *au-na* 'to live' に融合される。*aij* と *heke* は、それぞれ補充法として、*umborij, na lage* (IA からの借用語) の否定形をもつ。Biligiri (1965) によると、三人称以外では、*na lage* は用いられず、一般動詞と同様、否定形の *um* を *heke* の前に添えて否定を表わす。例えば、*um-iñ heke* (iñ : 1 人称単数) 「私ではない」<sup>(11)</sup> (P. 96)

- |   |                      |
|---|----------------------|
| (12) Soma o <sup>2</sup> -te <i>aij</i><br>「家」「に」           | 「ソマは家に居る」            |
| (13) ukař Soma <i>heke</i><br>「彼は」                          | 「彼はソマです」             |
| (14) Soma o <sup>2</sup> -te <i>au-ki</i><br>過去             | 「ソマは家にいた」            |
| (15) ukař Soma <i>au-ki</i>                                 | 「彼はソマでした」            |
| (16) Soma o <sup>2</sup> -te <i>au-na</i><br>未来             | 「ソマは家に居るでしょう」        |
| (17) Soma ukař-a <sup>2</sup> <i>agua au-na</i><br>所有「リーダー」 | 「ソマはこの人のリーダーになるでしょう」 |
| (12') Soma o <sup>2</sup> -te <i>umborij</i>                | 「ソマは家に居ない」           |
| (13') ukař Soma <i>na lage</i>                              | 「彼はソマではない」           |
| (14') Soma o <sup>2</sup> -te <i>um au-ki</i>               | 「ソマは家に居なかった」         |

ムンダ諸語の次には、インド=アーリア諸語についてみてみよう。小論では Nagpuri だけをとりあげた。

Nagpuri の体系とムンダ諸語である Kharia の体系は、面白いことに、と

(11) Kharia の例文については、筆者の所属する、ラーンチャー大学部族・地域言語学部の Rose Kerketta 先生に、チェックして頂いた。

てもよく似ている。現在時制では、*āh-* と *hek-* が、それぞれ存在を表わす *copula*、身分や属性を表わす *copula* であり、過去時制では *rah-*、未来時制では *ho-* にそれぞれ融合される。ただし未来時制では、存在を表わす *copula* として、*rah-* も用いられる。*āh-* と *hek-* の否定形は、それぞれ *nakh-* と *na lag-* である。<sup>(12)</sup>

- |                                 |                 |
|---------------------------------|-----------------|
| (18) Somā ghar-e āh-e           | 「ソマは家に居る」       |
| 「家」「に」 3人称単                     |                 |
| (19) u Somā hek-e               | 「彼はソマです」        |
| 「彼は」                            |                 |
| (20) Soma ghar-e rah-l-e        | 「ソマは家に居た」       |
| 過去                              |                 |
| (21) u Somā rah-l-e             | 「彼はソマでした」       |
| (22) Somā ghar-e ho-b-i / rah-i | 「ソマは家に居るでしょう」   |
| 未来 3人称単                         |                 |
| (23) u cāsi ho-b-i              | 「彼は農夫(になる)でしょう」 |
| 「農夫」                            |                 |
| (18') Somā ghar-e nakh-e        | 「ソマは家に居ない」      |
| (19') u Somā na lag-e           | 「彼はソマではない」      |
| (20') Somā ghar-e ni rah-l-e    | 「ソマは家に居なかった」    |
| 否定                              |                 |

[表記について] ā = /a/, a = /ʌ/ Nagpuri では、母音の長短の対立がない。  
(Jordan -Horstmann 1968)

(21)~(23)の否定文は(20)の否定文(20')を作る時と同様、否定を表わす形態素 *ni* を *copula* の前に置けば良い。

なお、*āh-* には助動詞の用法もあるが、*hek-* には他の用法はみられない。例えば、*u Ranchi jā-t ah-e* (*Ranch*: 地名, *jā* 「行く」, *-t*: 現在未完了, *āh-*: 助動詞, *e*: 三人称単数)「私はラッチーへ行くとところです」。これは、身分・属性の示す, *Mundari*, *Ho tan*, *Santali kan* が、進行相 (Progressive Aspect

(12) Nagpuri の例文については、ラッチー大学部族・地域言語学部の B. P. Kesari 先生にみて頂いた。

Marker) と関連していること、また、Kharīa の存在を表わす *aij* が助動詞としても機能を果すこと、等と比較すれば、重要な意味をもってくるかもしれない。

ドラヴィダ諸語の Kuṛux の場合、少し事情は変わってくる。存在を表わす copula は *ra'anā* で I A からの借用語である。身分や属性を表わす copula は、*hiknā* と *talnā* (方言によっては *tailnā*) の二形があり、自由変異をなす。*hiknā*, *talnā* は、Muṇḍa や I A のように欠如動詞であるが、*ra'anā* はそうではない。つまり、過去時制と未来時制では、これらの copula は *ra'anā* に中和される。*ra'anā* は Nagpuri の *āh-* と同様、助動詞の用法もみられる。否定形は、*malnā* (方言によっては *mailnā*) で、二つの交替形——つまり *malkan* (存在を表わす copula), *maldan* (身分・属性の表わす copula) ——がみられる。それに加えて、一般動詞のように、単に *māl* を copula の前に置くことによっても、否定文を作ることができる。<sup>(13)</sup>

- |       |   |               |
|-------|---|---------------|
| (24)  | Soma erpā -nū <i>ra'adas</i>                | 「ソマは家に居る」     |
|       | 「家」 「に」 3人称・単・男・現在                          |               |
| (25)  | ās Soma <i>hikdas / taldas</i>              | 「彼はソマです」      |
|       | 「彼は」 3人称・単・男・現在                             |               |
| (26)  | Soma erpā-nū <i>ra'acas</i>                 | 「ソマは家に居た」     |
|       | 3人称・単・男・過去                                  |               |
| (27)  | ās Soma <i>ra'acas</i>                      | 「彼はソマでした」     |
| (28)  | Soma erpā-nū <i>ra'aos</i>                  | 「ソマは家に居るでしょう」 |
|       | 3・単・男・未来                                    |               |
| (29)  | ās guru <i>ra'aos / manos</i>               | 「彼は先生になるでしょう」 |
|       | 「先生」 「～なる」                                  |               |
| (24') | Soma erpā-nū <i>malkas/māl ra'adas</i>      | 「ソマは家にいない」    |
| (25') | ās Soma <i>maldas/māl hikdas/māl taldas</i> | 「彼はソマではない」    |
| (26') | Soma erpā-nū <i>māl ra'acas</i>             | 「ソマは家に居なかった」  |

なお、(27)~(29)の否定文は(26')のように *māl* を動詞の前に挿入すればよ

(13) Kuṛux の例文については、ラーンチャー大学部族・地域言語学部の Indrajit Oraon 先生及び Xavier Institute of Social Studies の Alex Ekka 神父にチェックして頂いた。

い。

以上、チョターナーグプル地方の諸言語の *copula* について、詳しくみてきたが、わかりやすくするために、表にまとめて [Appendix] として P. 167~169 に載せた。

そこで、その表を見ながら、この区別の史的問題について、すこし考察してみたい。

Indo-Aryan と Muṇḍa の体系はよく似ており、Kuṛux については、あまり精練された体系ではない。すなわち、チョターナーグプル地方に関してのみ考えるならば、Dravidian が、この体系の起源とみるのはむしろかしいように思われる。

ムンダ諸語について、Pinnow (1966) は *\*mena* 'to be' が 'can be conjectually posited for Proto-Munda' (P. 177) と指摘しているが、その可能性はどれも少ないように思われる。確かに、Santali, Muṇḍari, Ho 等を含む Kherwarian 諸語においては、存在を表わす *copula* として *mena*<sup>?</sup> が全ての言語にみられる。しかし、Kherwarian と同じ北ムンダ諸語をなす Korku では、この *mena*<sup>?</sup> の対応語がないばかりか、存在を表わす *copula* と身分・属性を表わす *copula* の区別もない (Zide: 1988 personal communication)。一方、Kharīa と Juang からなる中央ムンダ諸語では、Pinnow (1968) が Juang に /*mena*/ 'sein' がみられることを報告している (P. 377) が、Juang を詳しく調査した Matson は、その Juang English list (Matson: 1964, pp. 65-77) に /*mena*/ を掲載していない。また、小論ですでにみた Kharīa では、*copula* は全てインド=アリア諸語からの借用語である。

さらに、南ムンダ諸語にはこの *mena*<sup>?</sup> の対応語は見当たらない。

Zide (1980, personal communication) によると Korku は南ムンダ諸語と同様、場所の *copula* をもつ。Korku *taākha* (多分 Muṇḍari *tai* Santali *tahē* 等と起源を同じくすると思われる) 南ムンダ諸語の多くは、Korku と同様、*copula of identify* として zero *copula* を、existential *copula* とし

て、*dVk(V)*-(Gutob *duk-/dik-* Sora *dəku*) をそれぞれもつが、この *dVk(V)* は、Korku *doò* 'to put, place' Sautali *dohɔ* 'to place, put' Mundari *doho/do*<sup>(14)</sup> 'to place, put down' と起源を同じくするムンダ個有語である。

ドラヴィダ諸語とムンダ諸語についてみてきたが、ではインド=アーリア諸語についてはどうだろうか。

Nagpuri の *āh-* は Old Indo-Aryan *as* 'to be' にさかのぼることができる (Jordan Horstmann 1968: 77)。また、Nagpuri と同様の体系が Bengali をはじめ、Oriya, Assamese<sup>(15)</sup> 等、Magadhan 諸語にみられる。例えば、Bengali では、*o Soma hɔy* (o「彼は」)「彼はソマです」、*Soma ghor-e ache* (ghor「家」e「に」)「ソマは家に居る」これらの否定文は、*o Soma nɔy*「彼はソマではない」、*Soma ghor-e nei*「彼は家に居ない」。また、過去時制では、*o Soma chilo*「彼はソマでした」、*Soma ghor-e chilo*「ソマは家に居た」と二つの copula の区別はなくなる。

小論の目的は、チョターナーグプル地方の地域特徴の共時的記述にある。この体系がインド=アーリア起源であると結論づけるためには、証明に必要な全ての当該言語——つまり、インド=ヨーロッパ語からモン=クメール語に至る——をみななければならない。それは、今後の課題としておく。

### Ⅲ. 結 論

チョターナーグプル地方は、三大語族がお互いに影響しあう、インドでも珍しい地域である。チョターナーグプル地方に拡がる全ての共同体は、長い間にわたって、社会的にも、文化的にも相互に影響しあってきた。こうした環境のもとで、言葉自体もお互いに干渉しあって、もともと違った言語グループに属

(14) (2)でみたように、Ho, Mundari では、音韻論的解釈による単一開音節形態素は、ニモーラで表現される。/do/=[doo]

(15) Oriya, Assamese の例が、Lakshmi Bai (1986. P. 200) によって、取り上げられているが、ムンダ諸語のデータ処理のずさんさをみるに、詳しく吟味する必要がある。

(16) Bengali のデータについては、Sanjay Basu Mullick 氏に例文を作って頂いた。それぞれのインフォーマントを務めて下さった方々に心から感謝の意を表わしたい。

する諸言語が、共通の言語特徴をもつにいたった。小論では、これら、いくつかの地域特徴の記述を試みた。

Emeneau がすでに示したワク組みに沿った形で、議論を進めてきたが、次のような特徴が、チャターナーグプル地方の諸言語に共通してみられる。

- (1) Echo Word Formation
- (2) Onomatopoeics
- (3) 類別詞
- (4) 指示詞幹(特に遠称を示す語頭の h-)
- (5) existential copulaとidentity copula の区別

(5)に関しては、今後の研究課題として、もう少しデータ分析を行なう必要があろう。

将来、ムンダ語源辞典 (Mnnda Etymological Dictionary) が完成されたあかつきには、この地域研究は飛躍的に進歩をとげるはずである。そして、我々は、その完成の日まで、日夜、努力を続けるであろう。

## [APPENDIX]

### The copula systems in the languages in Chotanagpur

#### (A) Munda language group

##### (i) Mundari (Munda, 1971)

	existential	identity
Present	mena <sup>?</sup>	tan
Past		taiken
Future		tain <sup>?</sup> baio <sup>?</sup> 'become'
Negative Present	bano <sup>?</sup> /ban/ bangai <sup>?</sup>	ka tan
Neg. Past		ka taiken
Neg. Future		ka tain      ka baio <sup>?</sup>

(ii) Santali (Bodding 1929)

Present	menak'		kan
Past		tahēkan	
Future		hoyok'	
Neg. Present	bənuκ'		baŋ kan
Neg. Past		baŋ tahēkan	
Neg. Future		baŋ hoyok'	

(iii) Ho (Deeney 1975)

Present	mena?		tan
Past		ʃaiken	
Future		ʃain	hoba 'become'
Neg. Present	bano?/baŋ/ baŋgai?		ka tan
Neg. Past		ka ʃaiken	
Neg. Future		ka ʃain	ka hoba

(iv) Kharia (Biligiri 1965, Malhotra 1982)

Present	aij		heke
Past		auki	
Future		auna	
Negative Present	umboŋij		na lage/ um heke
Neg. Past		um auki	
Neg. Future		um auna	

(B) Indo-Aryan language group

(1) Nagpuri (Jordan-Horstmann 1968, Nowrangi 1956)

Present	ah-		hek-
Past		rahl-	
Future	rahb-	hob-	

Neg. Present	nakh-		na lag-
Neg. Past		ni rahl-	
Neg. Future	ni rahb-	ni hob-	
(c) Dravidian language group			
(1) Kurux (Hahn 1911)			
Present	ra'adas		hikdas/taldas
Past		ra'ackas	
Future		ra'aos	manos 'become'
Neg. Present	malkan/māl	ra'adas	maldas/māl hikdas/māl taldas
Neg. Past		māl ra'ackas	
Neg. Future		māl ra'aos	māl manos

#### [Bibliography]

- Abbi, A. (1980) *Semantic Grammar of Hindi: A Study in Reduplication*. New Delhi : Bahri Publications.
- Annamalai, E. (1968) Onomatopoeic resistance to sound change in Dravidian. in *Studies in Indian Linguistics: M. B. Emeneau ṣaṣṭipūrṭi volume*. pp. 15-19. Poona and Annamalaiagar.
- Apte, M. L. (1968) *Reduplication, Echo Formation and Onomatopoesia in Marathi* Poona Deccan College.
- Bhaduri (1931) *A Mundari-English Dictionary*. Calcutta University Press.
- Bhaskararao, P. (1977) *Reduplication and Onomatopoesia in Telugu*. Poona : Deccan College.
- Biligiri, H. S. (1965) *Kharia: Phonology, Grammar and Vocabulary*. Poona : Deccan College
- Blain, E. (1975) *English-Sadri Dictionary*. Jharsuguda : The Society of the Divine Word.
- Bleses, C. (ed) (1956) *An English-Uraon Dictionary*. Ranchi : Dharmik Sahitya Samiti.
- Bloch, J. (1934) *L'Indo-aryen du Veda aux temps modernes*. Revised and translated by A. Master, *Indo-Aryan from the Veda to modern times*. Paris. 1965.



- Bodding, P. O. (1929) *Materials for a Santali Grammar II*. Dumka : The Santal Missoni of the Northern Church.
- (1932-36) *A Santali Dictionary. Vols, I~V*. Oslo : Det Norske Videnskaps Akademi.
- Burrow, T. & M. B. Emeneau (1961) *A Dravidian Etymological Dictionary (DED)*. Oxford : Clarendon Press.
- (1962) *Dravidian Borrowings from Indo-Aryan*. Berkeley : University of California Press.
- (1968) *A Dravidian Etymological Dictionary: Supplement (DEDS)*. Oxford : Clarendon Press.
- (1972) Dravidian Etymological Notes. *JAOS* 92. pp. 397-418, 475-91.
- Chatterji, S. K. (1926) *The Origin and the Development of the Bengali Language (ODBL)* London : George Allen & Unwin. (1970 Reprint Edition)
- Cook, W. A. (1966) *A Descriptive Analysis of Mundari: A study of the Structure of the Mundari Language According to the Methods of Linguistic Science*, unpublished Georgetown University Ph. D Dissertation.
- Deeney, J. (1975) *Ho Grammar and Vocabulary*. Chaibasa : Xavier Ho Publication.
- (1978) *Ho-English Dictionary*. Chaibasa : Xavier Ho Publication.
- de Vreese, K. (1968) Munda Pronouns in New Indo-Aryan. in *Pratidanam* pp. 59-61. The Hague : Mouton.
- Diffloth, G. (1976) Expressives in Semai. in *Austroasiatic Studies* edited by P. N. Jenner, L. C. Thompson & S. Starosta. pp. 249-64. Hawaii : University Press of Hawaii.
- Dimock, E. (1957) Symbolic Forms in Bengali. *Bulletin of the Deccan College Research Institute*. Vol. 18. pp. 22-29.
- Emeneau, M. B. (1938) Echo-words in Toda. *New Indian Antiquary* 1. pp. 109-17.
- (1956) India as a linguistic area. *Language* 32. pp. 3-16. [Emeneau (1980a) pp. 105-25]
- (1965) India and linguistic area. in *India and Historical Grammar*. pp. 25-75. [Emeneau (1980a) pp. 126-66]
- (1969) Onomatopoeitics in the Indian linguistic area. *Language* 45. pp. 274-99. [Emeneau (1980a) pp. 250-93]
- (1980a) *Language and Linguistic Area*. Essays by M. B. Emeneau. Stanford University Press.
- (1980b) Indian demonstrative pronominal bases : A revision. *Proceedings*

- of the Six Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society.  
pp. 20-27.
- (1983) Demonstrative Pronominal Bases in the Indian Linguistic Area.  
*IJDL* vol XII No. 1. pp. 1-7.
- Hahn, F. (1911) *Kurukh Grammar*. Calcutta.
- Hoffmann, J. (1903) *Mundari Grammar*. Calcutta : Bengal Secretariat Press.  
(1929-50) *Encyclopaedia Mundarica*. Vols I~XVIII Patna : Government Press.
- Hoffmann, K. (1952) Wiederholenden Onomatopoetika in Altindischen. *Indogermanische Forschungen* 60. pp. 254-64.
- Jha, S. (1958) *The Formation of the Maithili Language*. London.
- Jordan-Horstmann, M. (1968) *Sadani: A Bhojpuri Dialect Spoken in Chota Nagpur*.  
Wiesbaden : Otto Harrassowitz.  
(1974) Echo- und Reimwortbildungen in der oralen Sadani-Literatur (Chotanagpur/Indien). *Anthropos* 69. pp. 232-249.
- Krishnamurti, Bh. (ed) (1986) *South Asian Languages: Structure, Convergence and Diglossia*. Delhi : Motilal Banarsidass.
- Kuiper, F. B. J. (1965) Consonant variation in Munda. *Lingua* 14. pp. 54-87.
- Lakshmi Bai, B. (1986) A note on syntactic convergence among Indian languages : The verb 'to be'. in *Krishnamurti (ed)*. pp. 195-208.
- Langendoen, D. T. (1967) The copula in Mundari. *Foundations of Language. Supplement #1*. pp. 75-100.
- Mahapatra, K. (1976) Echo-formation in Gta? in *Austroasiatic Studies* edited by P. N. Jenner et al. pp. 815-31. Hawaii : University Press of Hawaii.  
(1986) Desia : A Tribal Oriya Dialect of Koraput Orissa. *Adibasi* Vol. XXV Nos. 1-4.
- Malhotra, V. (1982) *The Structure of Kharia: A Study of Linguistic Typology and Language Change*. unpublished Jawaharlal Nehu University Ph. D. Dissertation.
- Masica, C. P. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago : University of Chicago Press.
- Matson, D. M. (1964) *A Grammatical Sketch of Juang: A Munda Language*. unpublished University of Wisconsin Ph. D. Dissertation.
- Morin, Y. C. (1972) The phonology of echo-words in French. *Language* 48. pp. 97-108.
- Munda, R. D. (1971) Aspects of Mundari Verb. *Indian Linguistics* 32. pp. 27-49.  
(1979) *Muṇḍārī-Vyākaran*. Ranchi : Muṇḍārī Sāhitya Parisad.

- (1983) Jharkhand : A unique meeting place of linguistic and literary tradition. paper read at the International Conference on The Search of Unity in Diversity : A Crisis of Identity in Jharkhand. report appeared in *Economic and Political Weekly*. Vol. XVIII No. 25. pp. 1091-92.
- Nowrangi, P. S. (1956) *A Simple Sadani Grammar*. Ranchi : The D. S. S. Book Depot.
- Pinnow, H-J. (1959) *Versuch einer historischen Lautlehre der Kharia-Sprache*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- (1965) Personal Pronouns in the Austroasiatic languages : A historical Study. *Lingua* 14. pp. 3-42.
- (1966) A comparative study of the verb in the Munda languages. in *Studies in Comparative Austroasiatic Linguistics*. edited by N. H. Zide. pp. 96-193.
- (1968) Eine Mythe der Juang. in *Pratidanam*. pp. 371-80. The Hague : Mouton.
- Ramamurti, G. V. (1931) *A Manual of So : ra : Language*. Madras.
- (1933) *English-Sora Dictionary*. Madras.
- (1938) *Sora-English Dictionary*. Madras.
- Ramanujan, A. K. & C. P. Masica (1968) Toward a phonological typology of the Indian linguistic area. in *Current Trends in Linguistics* edited by T. Sebeok. Vol. V. pp. 543-577. The Hague : Mouton.
- Schapiro, M. C. & H. F. Schiffman (1981) *Language and Society in South Asia*. Delhi : Motilal Banarsidass.
- Singh, A. B. (1969) On echo-words in Hindi. *Indian Linguistics* 30. pp. 185-95.
- Sinha, N. K. (1975) *Mundari Grammar*. Mysore : Central Institute of Indian Languages.
- Tiwari, U. N. (1960) *The Origin and Development of Bhojpuri*. Calcutta : The Asiatic Society of Bengal.
- Turner, R. L. (1966) *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages (CDIAL)*. London : Oxford University Press.
- Vitebsky, P. (1978) *Sora "tag-words"*. paper presented in Second International Conference of Austroasiatic Linguistics. Mysore : Central Institute of Indian Languages.
- Zide, N. H. (1968) Munda and Non-Munda Austroasiatic Languages. in *Current Trends in Linguistics*. edited by T. Sebeok. Vol. V. pp. 411-30. The Hague : Mouton.
- (1972) A Munda Demonstrative System : Santali. in *Langues et Techniques* :

*Nature et Société* ed. by J. M. C. Thomas & L. Bernet. pp. 267-74.  
Paris Éditions Klincksieck.

(1976) A note on Gta? echo-forms. in *Austroasiatic Studies*. pp. 1335-43.

(1985) *Munda Demonstrative Bases: North-Munda and Gutob-Remo-Gta?*.  
Mimeo. Chicago.